

研究発表会報告

Re-examination of *Treasure Island*:

Stevenson's Sketch as an Epitome of North America

芝崎文子

『宝島』は、その場所やモデルとなった土地を巡り多くの論争を呼んでいる。本発表では、テキストと地図（『宝島』挿絵）における地質上の特徴や著者の伝記的事実を再考し、「宝島」が北米大陸の縮図として描かれていることを論じる。

地図には、本島（宝島）と小島（骸骨島）、大小二つの島が描写されている。ジムの乗ってきた船ヒスパニオラ号が、本文中おおむね「骸骨島」近傍に停泊しておりイスパニョーラ島を連想させることなどから、「骸骨島」及び周辺の「暗礁地帯」は西インド諸島と想定することができる。すると「宝島」は、その輪郭や小島との位置関係から、カナダ、アメリカ、メキシコから成る北米大陸として浮かび上がる。そこで、『宝島』における主要な地理的特徴を取り上げ、北米地図と照らし合わせてみると、両者の間に多くの共通点が見いだされる。

まず、「キッド船長の投錨地」である本島南部の入江はメキシコ湾とみなすことができ、そこに河口を持つ左右二つの線状湿地帯「沼」は、湾へと流れる河川、リオグランデ川とミシシッピ川に相当する。南東端に突き出した「白岩」や「砂州」は、形はもちろんのこと、白という色がカルスト地形の白色石灰岩や白砂のイメージと重なり、干潮時に本島と小島が繋がるような浅瀬であるといった記述が水深の浅い大陸棚を思わせ、そのような特徴を持つフロリダ半島一帯の描写として捉えられる。また、線状湿地帯間に高く聳えるごつごつした「大櫓山」、別名「遠眼鏡山」は北米西部の大山脈、ロッ

キー山脈を示し、本島北西に位置する「前檣山」はアラスカ山脈、南西の「後檣山」はシエラマドレ山脈として解釈できる。「後檣山」下方に位置する「船頭岬」は北米南西端のメキシコ付近であり、「森の岬」はデフォルメされたカリフォルニア半島である。ジムが崖に群れる「とど海驢」を見たのはちょうどその岬外縁部で、実際、コルテス海（カリフォルニア湾）にカリフォルニアアシカやトドなどアシカ科の生息が認められることから証明できる。さらに、本島北東に記され、羊歯葉のような形とされる「泉」は、明らかに五大湖を象徴しており、「ラムの入江」についてもセントローレンス湾と地形的に一致する。本島北部の外形も、やや変形されているとはいえ、基本的な輪郭はしっかりと残されている。狭く浅い入り口を持ち特色ある形をした「北の入江」は、島々が点在し入り組んだ海峡を有するハドソン湾と共通点を見せるなど、北米大陸北部と十分に相似している。また、宝の位置については、本島西部に三つの赤十文字印の位置が記されているが、北米における金鉱採掘地とおよそ合致している。上方に表記された二つは、『宝島』の描かれた19世紀当時ゴールドラッシュが起こったアラスカ、ブリティッシュコロンビアの鉱山を示す。そして残る一つ、シルバー船長が一番に目指した箇所は、まさに銀の生産量を誇るメキシコを指示している。

このように、「宝島」と北米大陸の間に様々な地誌的相関関係を見出すことができるが、それだけでなく、スティーヴンソンの伝記的事実を考察した時、宝の隠された島——「宝島」が何故、北米として考え得るかがいっそう明らかとなる。

スティーヴンソンにとって、北米は他のどの土地よりも宝庫たるべき大陸に違いない。それは、ジムが「宝島」で危険な冒険を終え宝を得たように、著者自身が、北米大陸冒険と苦難の末、大きな宝を手に行っている事実ゆえである。三つの赤十文字印のうち、宝の大部分が埋蔵されている上、ジムの辿り着くことができたその箇所に焦点をあてると、そこは、メキシコ北東部の鉄鋼業中心地として発展した都市の一つ、モンテレー（Monterrey）の位置

に相当する。ここで注目すべきことは、そのモンテレーという地名が、スペイン領都市モンテレー (Monterey) としてカリフォルニアにも存在することである。そしてその土地こそ、スティーヴンソンが生涯の宝となるものを得た曰くつきの地なのである。彼は、パリで恋に落ちた既婚女性ファニー・オズボーンを追って渡米し、大陸横断後、モンテレーにて再会を遂げ、ついには前夫サムの離婚承諾を得、彼女との結婚を成就させた。果て無き旅人スティーヴンソンであったためアメリカ永住は実現されなかったものの、彼はサンフランシスコで挙式を行い、ナパバレーやシルベラードにおいて、最愛の妻ファニーと彼女の連れ子ロイドと共に幸福な結婚生活を経験している。すなわち、スティーヴンソンにとって北米は思い入れの深い大陸、まさに「宝島」であったといえる。そして、著者自身が土地の事情に通じていたことや彼のアメリカにおけるロマン溢れる経験が、地図と物語の描写両方に自然と反映されていることが確信できる。

以上のように、『宝島』には、北米と共通する地誌的特徴が顕著に現れていると同時に、著者の伝記的事実による、宝の大陸としての北米像が織り埋められている。つまり、スティーヴンソンの描写する「宝島」は北米大陸の縮図として解釈することができる。

コメント

当発表はスティーブンソンの書いた「宝島」のモデルとなった場所についての新しい見解であり、大変興味深いものだった。発表の主題は特に、芝崎氏が述べるアメリカ大陸と宝島の一致について述べられている。ジムの乗ってきたヒスパニオラ号と、西インド諸島と対比させることから始まり、アメリカ大陸の重要な地点と宝島のメインポイントを詳しく調べておられる。芝崎氏は、スティーブンソンが伴侶を得た場所と宝の埋蔵されていた場所が一致していることも述べておられ、スティーブンソンが何故北米を宝島のモデルとしたかを研究してこられた。それは、スティーブンソンの生涯と結びつ

けたということで、作家の人生を研究するという点で素晴らしいことである。ただ、私自身はスティーブソンがアメリカを選んだとすれば、これだけではないと思う。夢の大陸としてのアメリカに異議を唱えるつもりだったのではないだろうか。私は宝島という実際にありえないものを創造し夢見る危険性をスティーブソンは述べているのではないかと思う。スティーブソンの生きた時代背景を調べることで、彼の人生との関連性もさらに深くなるはずである。そして、この論点のための証拠をもう少し、「宝島」本文から探り当てる必要があると思う。もしも、これがアメリカ大陸をモデルとしているならば、その証拠は文に隠されているはずである。また、作者が意図していることを引っ張り出すことにより、研究が楽しいものとなるはずである。今後、芝崎氏のスティーブソン及び彼の著作研究がさらに深められることを期待したい。

(谷 紀子)

Usage-Based Model に基づく間接発話行為理解のプロセス

宮田 久

本発表では、間接発話行為を例として取り上げ、発話理解のプロセスに対して Ronald. W. Langacker の提唱する認知文法がいかなる説明を与えることが可能かという点を考察した。私は、以前に同様の試みを Gilles Fauconnier のメンタルスペースの枠組みで行なったが、そこでは概念レベルのブレンドが問題となっており、必ずしも記号レベルでのブレンドが意識されていたわけではない。したがって概念として存在するものであれば、いかなるものでも発話理解の過程において喚起されることが可能であった。これに対して、Langacker の認知文法では、“the symbolic view of language” と繰り返し彼が強調するように、言語の記号性を重要視している。このような言語観の違いが、発話理解のプロセスに対して与える説明にも反映される

のは当然のことである。

Langacker は、発話の産出や理解は言語体系と実際の言語使用との間のカテゴリー化の関係によって説明されるとしている。また言語体系に含まれる言語単位は、従来音韻論・形態論・統語論・意味論・語用論として別々に扱われてきたものを、すべて音と意味からなる記号単位として捉えなおしたものであり、すべてを記号単位（あるいは構文単位）として扱えることを主張する。この考え方は、彼の使用依拠モデル (usage based model) に反映されており、今発表でもこのモデルを使用した。

本発表での私の主張はいくつかあるが、一つには使用依拠モデルのさまざまな特性が、間接発話行為の理解のプロセスに対して現実的で納得できる形での説明を与えることができるという点が挙げられる。発話の理解には、ノードの競合と抑制という動的なプロセスによりさまざまなルートが存在する。従って、発話の理解とは、そこで用いられた単語の言語的意味を単に組み合わせることによってなされるのではなく、単に話者の意図を復元する作業でもない。むしろそれは聞き手の側が、与えられた発話をもとに自ら構築するものなのである。従って、ある解釈に達成するルートは一つに限られるわけではなく、複数のオプションが可能である。またあらゆる社会慣習的な知識が言語体系に含まれるという言語に対する百科事典的な見方や、語彙項目が生起する環境としての構文スキーマの重要性など、使用依拠モデルの言語に対するアプローチの仕方は、間接発話行為に対しての裏りある視点を提供するものである。

もちろん、このような使用依拠モデルの考え方にまったく問題がないわけではない。発話の理解には話者と聞き手の相互作用によって立ち現れてくる意味の側面が重要であると思われるが、このことは使用依拠モデルにおけるカテゴリー化という認知現象のみによって説明するのは困難であり、話者と聞き手双方の意図と目的を取り込んだ動的で包括的な対話のモデルが必要となってくると思われる。しかし、そのような最終的な目標に対しての重要な

一步を使用依拠モデルは踏み出しているものであり、ここで扱われた間接発話行為だけでなく広く発話一般に対しての説明を提供する可能性をも秘めたモデルであることは確かである。

コメント

発表者は、認知言語学の提唱者の一人である、ラネカーの使用依拠モデルを用いて、発話が解釈されるプロセスの分析を行った。従来の規則を重視した文法理論では、文法的な表現と慣用的に用いられる表現は区別されるか、あるいは後者を例外的な表現として分析してきた。しかし、このような表現が容認されるかどうか、または慣用的に用いられるかどうかの判断に関しては、明確な境界線をひくことは困難であった。そこで、認知言語学では、表現の適切性はその言語が話されている共同体の中で容認されるか、されないかの相対的な判断によるものであるという立場をとり、この相対的な判断は、カテゴリー化の能力、つまり、「ある存在を一般的なスキーマによって特徴づけられるカテゴリーの一例として理解する能力」で説明している。

言語現象を、実際の言語使用から生じるスキーマの一部としてとらえることを可能にした認知言語学のアプローチにおいて、日常会話のように、実際に言語が使用される場合、話し手と聞き手が存在する。言葉の拡張やカテゴリー化を行い、ある表現の意味を解釈することは、話し手だけでなく、聞き手にも関わる問題となるが、発表者は、この聞き手の解釈にもとづいた間接発話行為を、認知的アプローチの枠組みの一つである、使用依拠モデルを用いて分析しており、その点に独自性が見受けられる。

間接発話行為といえ、本来であれば“Can you pass me the salt?”という発話には、言外に含まれる意味、つまり、会話の含意によって“Please pass me the salt.”という意味をあらわしうるというものであるが、発表者は、この分析をさらにすすめて、聞き手がこの発話を解釈する過程を、記号単位、つまりノードを用いた複合カテゴリーの形で示している。例にもあげ

られたように、この“Can you pass me the salt?”という発話によって聞き手が「依頼」であると解釈する4つのルートの可能性を提案している。この発話が最終的に「依頼」として理解されるには、どの解釈ルートにおいても“can you”というスキーマのノードである「質問」・「依頼」のうち両方、あるいは片方が活性化されることになる。特に、4番目の解釈ルートとしてあげられている「質問」のノードから拡張された「依頼」のみを活性化する可能性に関しては、その言語が共同体の中で慣用的に用いられ、その意味も定着した表現であるという、百科事典的な意味のとらえ方や、グラウンド内にあるその表現が発話された状況などからの影響をうけたのちに、「依頼」のノードのみが活性化され、カテゴリー化されることが理解できる。このように、使用依拠モデルを用いて、間接発話行為を分析することによって、サールの分析では問題となる点においても、このモデルでは、説明づけができることも考察されている。

最後に、今後の課題にもあげられているように、ある発話を発し、それを解釈する話し手と聞き手との間の意図や目的も関わる解釈のゆらぎも含めたモデルの構築を目指した、さらなる分析に期待したい。

(金志佳代子)

移動の意味：移動事象の認知的研究

小原雄次郎

移動事象の研究は Leonard Talmy の認知類型論的考察や Ray Jackendoff の語彙概念構造を用いた分析などにより発展してきたが、これらの研究では移動事象の意味の基盤に語彙的なものに規定していた。つまり移動の意味が具体的な語彙に具現化されると仮定していたのである。本発表では Adele Goldberg の構文文法と Ronald Langacker の動的依拠モデルを援用することで、移動の意味が動詞や付加詞などの個別的な語彙からだけでなく構

文レベルさらにそれらが相互に干渉する動的な意味ネットワークの中から創発されるということを示した。

議論を進めるにあたりまず Talmy の研究の再検討を行った。Talmy は移動事象に関わる意味要素としてフィギュア・グラウンド・移動・経路・様態といったものを仮定し、これらの意味要素の中でグラウンドと経路が移動事象の枠組みを構築する核心スキーマであるとした。そしてこれらの意味要素がどのように語彙化されるかを分析することで類型論的なパターンを導き出している。Talmy の研究で検討すべき点は、意味要素を仮定すること自体に妥当性があるのかということと、これらの意味要素を語彙化するというアプローチが認知的に適切であるのかということである。この二点を検証するために、動詞・付加詞・構文の各レベルの具体的な考察を行った。その結果、移動や経路といった意味要素を具体的な語彙項目との関連で捉えようとすると、これらの意味要素が極めて曖昧で判然としない概念になると分かった。特に移動という意味要素は語彙化というアプローチで捉えるには限界があると考えられた。そこで Langacker の動的使用依拠モデルを用いることで語彙化アプローチの補完を試みた。このモデルを用いることで、動詞や付加詞といった比較的語彙化の顕著な語彙項目と、構文のように意味解釈を行う上である程度融通の利く上位のスキーマを同じネットワーク上で扱うことが可能になった。さらにこれらの語彙や構文が相互に干渉しあうことで創発的に意味解釈が行われることも示すことができた。

本研究は類型論的な発展を企図するものであるが、今回の発表では動詞や付加詞の記述言語学的な分析から抜け出すことができなかった。複数の言語を横断的に分析していくためにも動詞や付加詞を認知類型論的に再定義していく必要があるだろう。

コメント

本発表は、動詞や、前置詞を含めた動詞句、あるいは構文にまで及ぶ移動

事象が表す意味を認知言語学の枠組みで捉えようと試みたものである。本発表で扱った言語も、英語を中心にしながらも、仏語、独語、西語等にまで及び、非常に示唆に富んだものである。

本発表のような、移動事象の認知的視点からの研究により、一連の生成系に見られる動詞中心の考察から、各々の事象を個別に検証することで、移動事象の「意味のありか」が、動詞自体にあるのか、前置詞を含んだ動詞句の中にあるのか、それとも Goldberg らが提唱するように構文レベルにまで拡張したレベルになって見られるのか、各々の事象に最も適したレベルで考えることに成功している。これは、発表者がとった認知言語学の枠組みが移動事象の分析レベルに合った結果であると思われる。

さらに、発表者は、Langacker が提唱する使用依拠モデルを適用することにより、移動事象の拡張関係、干渉関係、各意味間の関連性等を総合的に捉えることに成功していることは大変興味深い。

ただし、言語類型論の研究ということでいくつかの言語を扱っているが、その言語は、インド=ヨーロッパ語族内の言語に限られており、多言語でも発表者の用いた枠組みが通用するのかどうか、興味深いところだ。従って、今後引き続き言語類型論的な研究をする際には、より幅広い言語の研究が行われることを期待したい。

(藤井数馬)